



水道水

『碧い水の鼓動』

同時に切り 落とした薔薇。



二輪の薔薇は、同じ株から同時に切り落としたもの。その後、差した花瓶の水の違いから、これほど大きさが変わりました。左は水道水で、右は『碧い水の鼓動』です。薔薇を育てた方によれば、ここまで大きくなった薔薇は見たことがない、とのこと。果たして、「科学的な証明」は可能でしょうか。

＊『MIZUPOTO Letter (ミズポトレター)』2013年7月号より

＊セミナーでのことです。会場をご用意くださった方が、一輪の切り薔薇を、『碧い水の鼓動』を注いだ花器に差していました。その方は、それになんの意図もなく、ただ場が和むかな、とそうしたようです。その薔薇は、会場の近所に住む女性から、数日前にいただいたものでした。さあセミナー開始直前。ご来場の方々が次々とお見えになるなか、もちろんその女性もおられました。「あら、なんでこんなに大きいの？」その女性は、挨拶もそこそこに、一輪差しの薔薇を見るなり驚いて声を上げたのです。なんでもその女性によると、会場の薔薇と、同じ株で同じ時に切った薔薇を、自分の家に飾ってあるとのこと。その薔薇と比べて大きさがまったく違う。それに自分で育てた薔薇がこれほど大きくなったことはない、と言うのです。「おかしいわ。ちょっと持ってくるわね」と、女性はいったん自宅に戻られました。そこで彼女が持参した薔薇と、会場の薔薇とを撮影したのが上の写真です。左が切り落として水道水に差したもの、右が『碧い海の鼓動』です。確かに大きさが違います。

水と生命

水が始まり、水で終わる。

生命を有するものは、水と絶対的な相互関係にあります。

たとえば、私たち人間は、お母さんのお腹のなかで生を受け、十ヶ月間、羊水というもつとも安心できる水のなかで生育し、「オギャー」と外界に出たとたん、「産湯」というお水のお世話になり、その後長い歳月を経て、臨終時には「死に水」というお水をいただく。人間ばかりでなく動物も、植物も、水なくして生存生育は不可能です。

たとえば植物は、水を与えない限り、発芽という生育段階には進めません。そこに水が与えられると、生命が動き始める。

水という存在があつて初めて、生命体は、生きる、という過程に進むのです。

水道水、『碧い水の鼓動』、ミネラルウォーター

では今度は、その水自体に着目しましょう。

水道水、『碧い水の鼓動』、ミネラルウォーター。三つのお水を用意し、それぞれを同じ形状の花瓶に注ぎました。下の写真は、その三つの花瓶の水の状態を、日を追って撮影したものです。

日が経つにつれ、『碧い鼓動の水』、ミ

ネラルウォーター、水道水の順で、水が減っているのが分かります。

吸収する水の量が多いほど、その植物の生長や元気度合いが大きいことを表しています。切り花の場合、花瓶のなかの水量の減り具合、水の汚れ具合で、花そのものを見なくても、元気度合いが分かる、ということです。

「下（根や水）を見れば、上（葉や花）が分かる」と師であるY先生の言葉が過ぎります。

というのも、『ミズポトレター二〇一三年七月号』では、薔薇の大ききで水の違いが分かる、とお伝えしましたが、その後、多くの方にご協力願ひ、様々な実験をやってみたところ、どうもすべてが一〇〇パーセント、そうと言える結果が出なかったのです。

葉や花など、上ばかり見ていると、同じ結果が出ないのですが、根や水など、下の状況に着目すると、水の減り具合や汚れ具合に、一致した結果が得られました。Y先生の言葉は、まさにその通りだったのです。

水道水、『碧い水の鼓動』、ミネラルウォーター。この三つの水のうち、『碧い水の鼓動』が、もつとも花瓶のなかの水がきれい（透明度が高い）で、水の量の減少が著しい。これは、前号でもお伝えしているように、『碧い水の鼓動』を注いだ花瓶のなかの水が、生命

維持環境としての整然とした反応系になつていないことを示しています。酸化や腐敗ではなく、ひたすら分解に進んだ物質は、原子となり、そこで原子転換を起こして、その環境にもつとも適切な物質へと変化しているのです。

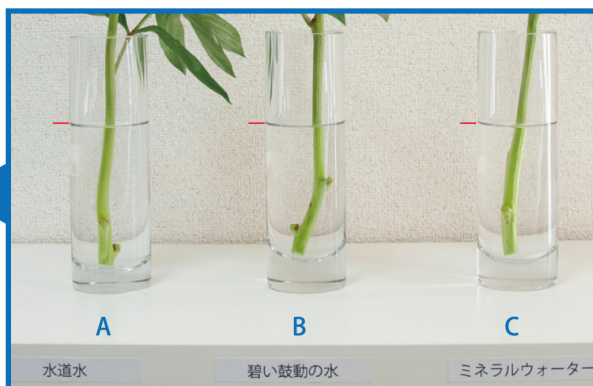
この様子は、まるでお母さんのお腹のなか、羊水ですつと守られ、そこですくすく育っているかのようです。羊水と胎児が共鳴し一体になつていうに、切り花と花瓶のなかの水が共鳴して一体になつています。生命体と共鳴する水は、あたかも生きていくかのようです。

知らないことを知る

いえ、生きていくかのよう、ではなく、実際に水は生きていくのではないのでしょうか。実際に、「水は知的な生命体であり、相手の意志が分かる。人の意志や意識を水は感じていく」という見解の著者や論文は、思ひのほか多く発表されています。私自身、水に関する多くの実験をする者として、その仮説を除くのは、なにか真相を見落としてしまうような懸念さえ抱くようになりました。

水が相手の意志を理解する。この考えに疑問を持たれる方が多いことはもちろん承知しています。しかし、その考えは、もしかすると、常識という名

2013年6月2日



左から、A. 水道水 B. 碧い水の鼓動 C. ミネラルウォーター。
『碧い水の鼓動』が一番早く、水が減っていく。

水まきおじさん
水を考える。
第6回 「植物と水との相互関係」

Text by
Kohsuke Sakai

酒井宏祐

の偏見である、という可能性も否めません。

「もしかしたら、水はこちらの意志を理解しているのかもしれない」。一方こちらは思い込み、思い過ごし、気のせい、と指摘されかねない考えです。

ただ、現在、日本で主流の科学では、水の秘められた能力を証明するのが困難なのは確かです。「知らないことを知る」という先人の考えに則れば、水への可能性を頭ごなしに否定するのは現在の常識から抜け出せずにいることにはなりません。

実験者の人間性

これは重要な発言ですね。仮に、水がこちらの意志を理解する、あるいは何らかの反応をするのだとしたら、実験は、実験を行う人の人間性によって大きく異なってしまう。実験は同じ条件で行うことが必要ですが、その実験をする人間性を同一のものにすることは不可能です。

物事を肯定的に見る人、否定的に見る人、左脳派、右脳派、感性豊かな人、まったく感性というものが見当たらない人。この人間性が実験に強く影響してしまうとしたら…？

この根源的な不確定要素があるからこそ、現代日本では、水への理解が深まらないのです。

分水嶺

常識や偏見にとらわれることなく、水への理解を深める。これは、水を研究する者に課せられたテーマです。水への理解を深めていくことで、人類は、自然の素晴らしい能力を認識する糸口をつかむでしょう。

いつしか、自然の能力を信じ、活用する時代が必ず来ます。

自然の能力が最大限に活用される時には、いま、私たちが行なっている技術や装置はまったく必要のないものになつていくはず。『碧い海』や『碧

い水の鼓動』などは、それまでのピンチヒッター。矛盾するようですが、私たち人間は、『碧い海』や『碧い水の鼓動』などが要らなくなる日を早く迎えなければなりません。残念ながら、いまの地球環境や人類の考える方向性を見ると、私たちの出番もまだありそうです。

「水に自分の思いなど、分かるわけがない」と考えるか、「水には、気持ち伝わる」と確信するか。どちらを選ぶかは、私たち一人ひとり次第。これから私たちが、どんな世界を創造していくかの分水嶺でもあるでしょう。

水への理解を進めていくことで、人間は、自然の素晴らしい能力を認識する糸口をつかむでしょう。



Profile of Kohsuke Sakai

1943年奈良県生まれ。近畿大学法学部中退後、バイオエネルギー研究所及び生命環境工学中根研究所にて生命体における、情報伝達のメカニズム及び情報伝達素子等の研究に従事。1994年頃より独自理論を加味した、各種波動機器類の研究と開発に着手。2000年、波動計測器を含む、他の波動機器の製作。2011年、上原麻(大阪府立大学・名誉教授)と共に、水の開発に着手。現在、一般社団法人「地球と水と命」理事

2013年6月9日



2013年6月7日

